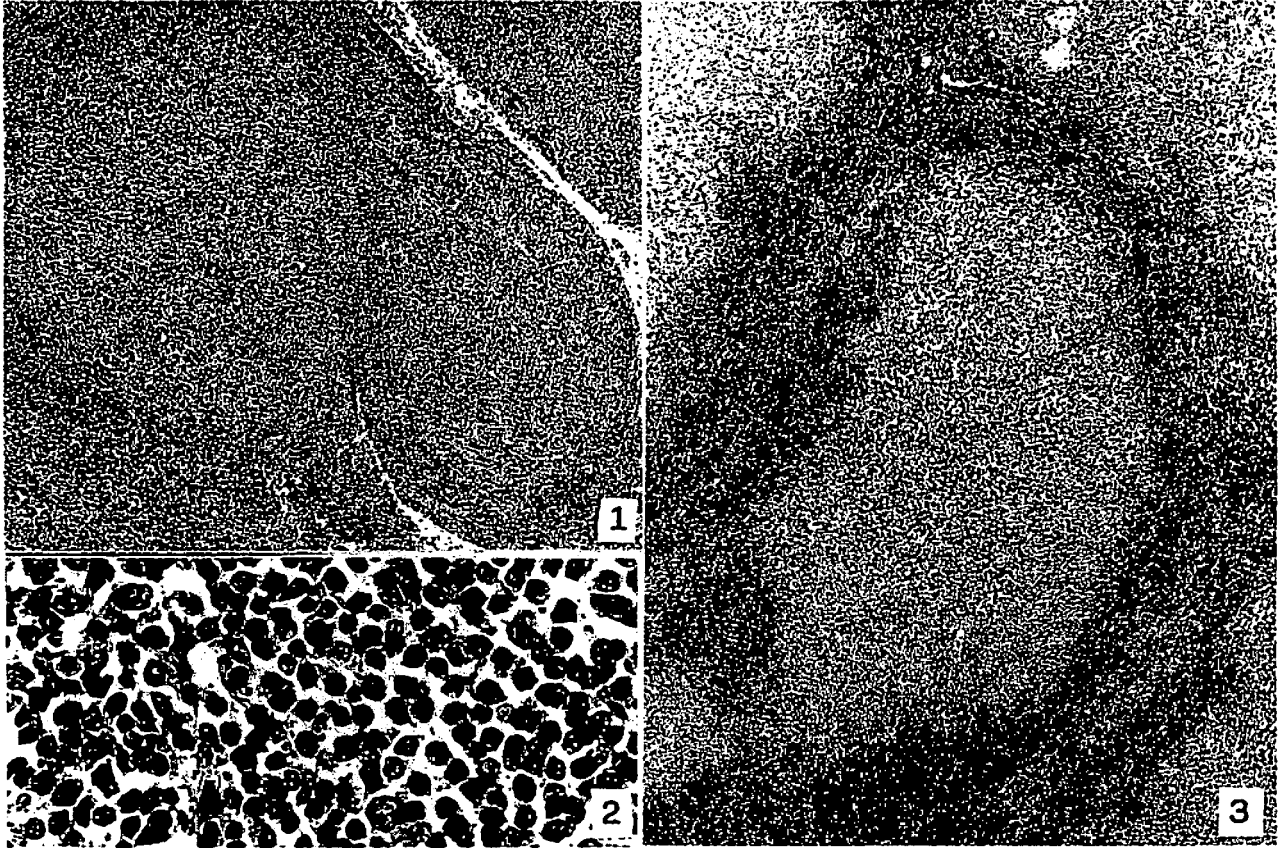


# 子牛の濾胞性リンパ腫

農林水産省家畜衛生試験場病理第一研究室・大分家畜保健衛生所出題  
第28回獣医病理学研修会提出標本No.488



動物：牛，黒毛和種，雄，6ヵ月齢。

臨床的事項：初診時に消瘦と貧血，浅頸リンパ節と腸骨下リンパ節の腫大，右腰部の小児頭大の血腫が見られ，リンパ球数は675,000/ $\mu$ l，BLV抗体は16倍を示した。一週間後に放血殺し，剖検した。

肉眼所見：浅頸リンパ節，腸骨下リンパ節，胸腔内及び腹腔内の各リンパ節の腫大，巨脾，気管支分岐部の腫瘍塊，大腿骨髄の白色病巣，肝の軽度腫大が見られた。

病理組織学的所見：リンパ節では多数の巨大な濾胞様構造を有した細胞増殖巣が密在し，濾胞間組織は圧迫され狭小となっていた（写真1， $\times 40$ ）。細胞増殖巣の周囲は密な好銀線維で被われ，内部では好銀線維が乏しかった。増殖している細胞は中型のリンパ様細胞で類円形の核を有し，核小体が目立ち（写真2， $\times 400$ ），時に核分裂像を示した。一部の細胞増殖巣には固有の胚中心と

暗殻の痕跡があり，tingible body macrophagesが目立った。脾においても巨大な濾胞様構造を伴ってリンパ様細胞が高度に増殖していた（写真3， $\times 40$ ）。リンパ様細胞は口蓋扁桃の濾胞と濾胞間組織，肝グリソン鞘，骨髄に増殖巣を形成していた。さらに，肺の細気管支周囲，心筋，腎，脛幹筋にも瀰漫性に浸潤していた。ストレプトアビジン・ビオチン法によって，増殖している細胞にはIgM，IgGおよびIgAの各免疫グロブリンは証明されなかった。

以上の所見から腫瘍細胞は胚中心由来が示唆され，人・豚で見られる濾胞性リンパ腫に相当するものと考えられた。また，BLV感染の影響も示唆された。

病理組織学的診断：子牛の濾胞性リンパ腫(Follicular lymphoma)。